

「悪霊に取りつかれたガダラの人をいやす」という長い小標題が掲げられます。先週学びました8;23-27では、風や波といった外部から襲いかかる悪意に向き合うマタイのイエス理解でした。それに対し、本日の箇所は人の内側に巣くう闇の部分との向き合いが対象とされます。

マタイはこの伝承をマルコ(2;18-22)から得ています。マルコではこの物語はたいへん長いものに編集されています。悪霊に取りつかれた人(精神的な疾患に苦しむ人)の乱暴ぶりと苦悩が記され、次にイエスへの彼の抵抗と懇願が述べられます。さらに癒された後、彼は町の人々と対面して自らこの出来事の証人となり、自分の出身地一帯で伝道を始めの姿が語られます。

しかし、マタイはいつものように物語を改変し短縮しています。注目すべきは、悪霊に取りつかれた人のその後についてはまったく関心を寄せていないことです。そればかりか途中から彼らは登場さえしていません。したがって町の人々が現場に駆けつけても、そこにはイエスしかいないということになります。

マタイはこのように物語を切り詰めながら、しかし自らの神学的意図を前面に押し出します。それは「まだその時ではないのに」(29)という彼らの叫びです。直訳すれば「時に先立って」、もしくは「時の流れ(順番)に先回りして」となります。これはマタイが付加したオリジナルの言葉です。それは終末論です。つまり、当時のユダヤ教黙示思想がその背景にあり、「その時」になれば「悪」は根源的に滅ぼされるという意味を加えたのです。マタイの終末理解とは悪は滅びるという一貫性に終始貫かれているという点です。

それでは何故彼らを癒したのに、イエスは町の人から感謝されるどころか、反対に追い出されてしまうのでしょうか。マルコ版では「いやされた人がデカポリスで伝道する」と結論を大団円で締めくくっています。しかし、マタイはそ

れさえも省略し、追い出されるイエス像を結論に持ってきました。何故なのでしょうか。

それはおそらく町の人、つまり既存の価値観に対する問い直しだったのではないのでしょうか。悪霊に取りつかれたと揶揄される精神的な疾患を持つ人々に対して、そうでない町の人々の関わり方が問題視されてゆくのです。そこにはもちろん初代教会も含む人間理解の根幹への問いかけがあったのです。人々はそのイエスの問いを拒んだのです。なぜなら悪霊につかれた人が凶暴だったからだと言頭の冒頭に説明されます。

人生には悲しいこと、寂しいことがたくさんあります。楽しいこともあります。が、やっぱり辛いことの方が多いようにも思います。いつも喜んで明るく過ごすわけにはいかないものです。それでも、生きる知恵の最も深い姿は、人生を喜ぶことの中に隠されているのです。なぜなら、悲しみには主観に流される弱さがありますが、喜びには主観に流されないで事実押し留まる強さがあるからです。

悪霊につかれた人を置いてきぼりにする生き方からは喜びなど生まれて来はしません。指摘したイエスさえ追い出してしまふ狭量な悲しみだけが残るのです。人生はそんな悲しみでは見通せません。共に生きようとする喜びの中でようやく見通せるものなのです。イエスはそこに先立ち行かれるのです。